

ISGM NEW PERM AUDIO

立ち寄り場所

2018年4月23日作成

サンディ・ゴールドバーグ、sgscripts

ストップリスト：

1階フロア

リビングルーム+ウェルカム ペギー・フォーゲルマン
コートヤード クリスティーナ・ニールセン
スペイン回廊 クリスティーナ・ニールセン
ブルールーム ケージー・ライリー

2階フロア

ラファエルルーム クリスティーナ・ニールセン
タペストリールーム クリスティーナ・ニールセン
ダッチルーム クリスティーナ・ニールセン

3階フロア

ティツィアーノルーム ナット・シルバー
ALTティツィアーノルーム ナット・シルバー
ロングギャラリー クリスティーナ・ニールセン
ゴシックルーム クリスティーナ・ニールセン

リビングルーム

ペギー・フォーゲルマン：こんにちは、私は美術館の館長を務めるペギー・フォーゲルマンです。本日は、当美術館にお越しいただき、またこのツアーにご参加頂き誠にありがとうございます。各展示室では、私の同僚が自分のお気に入りのオブジェについて紹介し、イザベラ・スチュワート・ガードナーに関する話をさせていただきます。

まずこの部屋でくつろいでいただく間、今から皆さんが体験される旅について少しお話しさせていただきます。今、皆さんが通られた硝子扉の入り口付近は、イザベラ美術館が近年行った増築の一部です。コレクションや展示方法に関していえば、非常に独創的で、とてもユニークな美術館だと言えます。美術館そのものがイザベラの作った一つの大きな芸術作品なのです。

イザベラが最初にこの美術館を開館した時に、皆さんが個人的に招待されたところを想像してみてください。それは1903年のことでした。彼女の写真が本棚の壁に展示されていますので、みなさんを招待したこの「女主人」をご覧ください。

さて、イザベラ・スチュワート・ガードナーとは、どんな女性だったのでしょうか？彼女はニューヨークの資産家の家庭で育ち、若い頃、ヨーロッパを旅して回っていました。彼女が20歳の時に、ボストンで最も彼女にふさわしい男性であったジャック・ガードナー氏と結婚しました。ガードナー家は社会的地位の高い名門一家でした。誰に聞いても、数多くの人が口を揃えてこう言いました！イザベラは「堅苦しい」ボストン社会に衝撃を与えては楽しんでいた、と。彼女は、物おじせず、型破りな女性で、冒険が大好きでした！そして夫とともに世界中を旅しました。彼女の父親の遺産を引き継いだことにより、イザベラは美術品の収集を本格的に始めることとなります。ボストンの人々に芸術の素晴らしさを伝えたかったのです。

イザベラが亡くなった時、彼女はこの美術館をそのまま残し、「永遠に一般の方々の教育と喜びのためにお使い下さい」と遺言を残しています。

私達は彼女の残した建物を「ザ・パレス（宮殿）」と呼んでいます。大きな本棚のある壁に向かって立っていらっしゃるなら、反対側を向いて下さい。**ガラス越しに、宮殿の外観が見えると思います。**素っ気なく装飾もないレンガですよね。「宮殿」とは程遠いと思います。建設開始当初、ボストンのメディアは「ガードナー夫人は一体何を建て始めたのか？」と怪しんだものです。でも、彼女はサプライズにしたかったのです。

このリビングルームを出る準備ができましたら、新しく増築された建物を繋ぐガラス回廊を通り、イザベラの「宮殿」へとお進みください。皆さんもきっと、驚かれると思います。どうぞお楽しみ下さい！

コートヤード

クリスティーナ・ニールセン：私は学芸員のクリスティーナ・ニールセンです。この非常に美しいコートヤードについてお話しする前に、少しだけ口を閉じたいと思います。*雰囲気に浸ってみて下さい。**先頭に人が集まっている場合は特に、コートヤードの端やその周辺を歩いてみて下さい。石づくりのベンチにも、腰かけてみて下さい。**

聞こえてくるのは、モーツァルトの魔笛です。イザベラは、美術館開館の夜、この曲の演奏のために、オーケストラを招きました。*初めて来館する方に、コートヤードを下から上へ見るようお願いしています。そうすると、イザベラが時間の旅をしているようにも思えます。下側は古代の彫刻が集められた庭のようになっています。*中央はローマのモザイクです。*モザイクの中心部にはメデューサの頭という衝撃的な絵が描かれています。**メデューサは神話上の生き物で、その目に見つめられると男性は石にされてしまうと言われていました。*次に、メデューサを取り囲むように並ぶ古代ギリシャおよびローマ時代の彫刻の数々をご覧ください。**これらは全て女性の像です。*イザベラは様々な角度から女性を支援していました。彼女は、20世紀の鍵は女性の教育にあると言っていました。

見上げると、ピンクの漆喰の壁と窓が見え、イタリア、ベネチアのルネッサンス宮殿を思い起こさせます。*イザベラはベネチアを愛してやみませんでした。彼女はベネチアにも自宅を所有しており、建物が水の上に浮いているかのように見え、美しいもので溢れている魔法のような場所を、アメリカでも再現したいと思っていたのです。イザベラは、アメリカは芸術を必要としている若い国だと言っていました。それが彼女の使命だったのです。*

次に、植物についてお話しします。1つ1つの植物が全て、鉢から**植えられている**と知ったらきっと驚かれるのではないのでしょうか！芸術作品を守るため、天窗には紫外線フィルターが施されており、植物をここで育成することはできません。そのため、ほとんどの植物は毎週植え替えられています。そして、6週間毎に造園デザイン全体が変更されています。ガラスの屋根はイザベラの当初の設計の一部で、当時は最新技術でした。

コートヤードから移動する前に、重要なことを言っておきたいと思います。この建物はイザベラの自宅として造られたわけではありません。よく誤解されるのですが、彼女は美術館にするために造りました。ただ、最上階に彼女自身のための小さなアパートを作っていました。見上げて、彼女が上層階の窓から身を乗り出し、どんなに**細かなところにも**正確な注文をつけるため下にいる作業員に叫んでいるところを想像してみてください。彼女は実際に叫んでいたそうです。

この建物が完成した頃、彼女は60代でした。時は1902年、新世紀の幕開けでした。建物完成後の一年間は、彼女は館内の美術品の設置に時間を費やしました。彼女は、コレクションの展示方法を永久に何も変えてはならないと遺言状に記しています。よって、今、皆さんが体験して

いるものはイザベラのビジョンそのものなのです。そして、彼女のビジョンの一部には照明も含まれており、一般的な現在の美術館にある明るい照明と比べて、少し暗いと感じている方も多いと思いますが、少し時間をかけて目を慣らすと、イザベラの意図が感じ取れてくるはずで
す . . .

スペイン回廊

クリスティーナ・ニールセン：部屋の端にある波打ったアーチの下の巨大な絵に向かって進んで下さい。引き込まれるように感じませんか？そして音楽が聞こえますか？これはイザベラのお気に入りのフラメンコのレコードから、この絵を描いた画家ジョン・シンガー・サージェントからの贈り物だったそうです。男達の歌とギターに合わせ、踊り子がスカートを翻し、足を踏み鳴らしています。壁に描かれたダンサーの影の形は、いつも、つむじ風を思い起こさせます。サージェントはこの絵に「El Jaleo」という題名をつけました。-意味は・・・「大騒ぎ」です！

サージェントとガードナーは親友でした。サージェントはガードナーが推奨していた現代画家の1人で、実際に、彼は上階のギャラリーをアトリエとして時折使用していました。ガードナーとアーティスト達との親交は、この美術館の重要なストーリーでもあります。音楽との関係もしかりです。絵画に描かれたあらゆる楽器も彼女を楽しませていたに違いないと私は思っています。

絵を間近で見たいのなら、少し下がってご覧になって下さい。***

絵の上にあるアーチとアーチを支えている柱は、スペイン建築に関連しています。**更に数歩下がって、右手にある壁をご覧下さい。華やかな模様が入ったタイルが何百枚も埋め込まれています。これらはメキシコのある教会から取り寄せたものです。

絵の周りにある全ての物がイザベラの展示の一部なのです。美術館での旅を始めるにあたり、イザベラはこの美術館全てを、訪れる人の関心を引き込むかのようにデザインしたことを知っておくことが重要です。なぜ特定の芸術作品と一緒に置き、各部屋の展示方法を決めたのか、彼女は書面を残していません。しかし、知的な反応よりも、感情的な反応をうみたいと言っていたのは確かです。彼女は来館者にユニークな美術館体験をしてほしいと願っていたのです。それゆえ、この美術館には一般的な作品紹介ラベルが設置されていません。皆さん自身に意味を見出してほしいと、彼女は願っていたのです。

それでは後ろを向いて下さい。絵に背を向けて、ゆっくりとこの長い空間の端まで歩いて下さい。**足の下にある不揃いな石を感じて下さい。**あちこちに目も向けてみてください。美術館のあらゆる空間に見るべきものが多くあり、全ての詳細を一度に把握するのはとても困難ですので、少しアドバイスを差し上げたいと思います。1つ1つの部屋で、パッと目を引くものがあれば、少し近寄ってご覧になって下さい。それから、少し下がって、周辺にあるものとの関連性や、部屋の反対側で向かい合っているものについて、考えてみて下さい。関連性が見えてくるはずですよ。—イザベラが意図的に行ったものかもしれませんし、皆さん自身の体験によるものかもしれません。それが、イザベラが皆さんに体験してほしいと望んでいた個人的でユニークな反応なのです。

ブルールーム ケージ

ケージ・ライリー：こんにちは、私はコンサルティングキュレーター(学芸員?)のケージ・ライリーです。イザベラ・スチュワート・ガードナーの個人アーカイブ作品を担当しています。この部屋は、イザベラ個人の友人関係を明かすオブジェで溢れています。壁にかけられた絵画の多くは、彼女の親しい友人達が描いたものです。これらの絵画を装飾アート、家具や織物、そして彼女の友人からの手紙や写真とともに展示しています。美術館全体を通して、日常生活と素晴らしい芸術作品などを結び付けることに、彼女は喜びを感じていました。

それでは、2つの窓がある壁側に向かって進んで下さい。**窓の間に、突き出ている壁があります。*その前に、天井からボートの形をしたメタル製のランタンが掛けられています。*そこでお会いしましょう。そこに着くまでに時間調節が必要な場合、オーディオガイドを一時停止して下さい。** *

ボートの形のランタンの真下にあるものに注目していただきたいと思います。華麗な曲線の付いた額の中に、小さな丸い肖像画があるのがお分かりでしょうか？それがイザベラです！皆さんも彼女と直接会って見たかったのではないのでしょうか。*彼女の友人であるアンデシュ・ソーンがベネチアでこの絵を描きました。-彼女の青い瞳が輝いているのが分かりますよね！その輝きが彼女の伝説的なカリスマをよく表していると思います。それでは、イザベラの肖像画を見ながら、少し左側に移動すると、半分壁を行ったところにある**大きな絵の下に、入れ物が1つあると思います。イザベラの形見が中に入っているのですが、その形見が光に弱いため、入れ物の中に入れて保管しなければならないのです。彼女はその入れ物を非常に慎重に配置していました。彼女自身の人生とアートコレクションと一緒に整理していたのです。カバーを外すと、長髪巻き毛の若い男性の写真が見えると思います。*彼がバーナード・ベレンソンで、イザベラのアートアドバイザーの1人でした。イザベラは、ベレンソンがちょうどこの写真を撮影した頃の年齢である、かなり若い頃から彼の教育を支援しており、後に親しい友人となったのです。イザベラには、評論家、美術史家や画商など数多くの専門アドバイザーがおり、彼女のコレクション収集を支援していました。

それでは、右隅にある入れ物の中の女性の写真をご覧ください。*彼女の髪は美しくセットされており、意志の強そうな女性に見えます。彼女は、社会改革主義者であり、女性の権利擁護者であるジュリア・ウォード・ハウです。イザベラが所定のケースに入れたものとその近くにあるアート作品との関連性は、常に明確なわけではありません。でも、ここにははっきりとした関連性が見えます！そのちょうど上にある、壁に掛けられた大きな絵画をご覧ください！パリの公共交通機関に乗る、独立した女性の新たな時代の様子が描かれています。

他の人が見ていなければ、カバーを掛け直して下さい。この部屋に、もう1つご紹介したいものがあります。**この絵から、皆さんの右手に*ギャラリーが見えます。**出口の近くに低い本棚が見えると思います。**

その本棚は、イザベラの個人的な知り合いの作家が書いた書籍で溢れています。美術館のあちらこちらにも本棚を見かけるかと思えます。レアな書籍や手書きの原稿のコレクションは、イザベラが芸術収集を始めた「きっかけ」でもありました。

友人の作品に加え、イザベラは、彼女が生きた時代のコンテンポラリーアートで、ブルールームを埋め尽くしています。彼女は当時のアーティストやミュージシャンを熱心に支援していました。この部屋の隣にあるイエロールームでは、それが更によく表れています。

ラファエルルーム

クリスティーナ・ニールセン： 私は、コレクションキュレーターのクリスティーナ・ニールセンです。この部屋に足を踏み入ると、盛期ルネッサンスとして知られる時代のイタリア貴族の家に移ったかのように感じます。皆さんがもたれる第一印象は・・・赤い！ではないでしょうか。まさに真っ赤です。最近全面改装を終えたばかりのこの部屋とオブジェは、イザベラが展示を設置した当初の非常に大胆なビジョンを思い出させてくれます。

それでは、コートヤードが見下ろせる3つの突き出した窓の辺りからご案内を始めたいと思います。* ***窓の前には、台の上に大きな大理石のボウルがあり、2匹の動物がそこに休んでいます。このオブジェには、ルネッサンス時代のローマやギリシャのアンティークを再発見するというこの部屋のテーマがぎゅっと詰め込まれています。ボウル自体は古代ローマのものです。動物は違います。ボウルの内側を見ると、ルネッサンスの職人が両サイドの大理石を切削り、17世紀の動物を加えています。ちょうどこの部屋や建物が、イザベラがルネッサンス宮殿の想像したものであるのと同じように、このボウルはルネッサンス時代にアンティークを想像して制作されたものでした。

それでは、コートヤードに向かう窓に面し、左に曲がって下さい。*今、目の前にある出入口のちょうど右手にある横幅の大きな絵に向かって進んで下さい。**イタリアの巨匠、サンドロ・ボッティチェリによって描かれた作品で、当美術館の中で最もアクションに溢れる絵画です。古代ローマで有名なルクレツィアの悲劇を描いたもので、ルネッサンスでも人気が高かった作品です。作品の左側に描かれた、緑色のドレスを着ているのが貞淑な妻ルクレツィアです。**彼女は手を挙げ、ローマ時代の独裁者の息子から口説かれるのを拒絶しています。その男は、もし彼女が自分と夜を共にしないのなら、彼女の男の召使と共に殺し、あたかも恋愛関係にあったかのように2人の死体を一緒に放置してやると彼女に言い放ちました。彼女は家族の不名誉を避けるため、しぶしぶ承諾したのでした。

絵画の右端には、彼女が家族に何があったかを打ち明け、悲しみに泣き崩れているシーンが描かれています。そして演劇の舞台かのようにも見える中央部分には、自殺を図った時に使った短剣が身体に突き刺さった、彼女の**遺体**が見受けられます。物語によれば、ルクレツィアの死は独裁君主政治の崩壊を駆り立てるキッカケとなり、ローマ共和国の創設を導いたと言われていました。兵士達の身振りを見ていると、悲しみに打ちひしがれた彼らの泣き声が聞こえてきそうです。

貞淑な女性というテーマのこの絵は、その構成からも、高貴なイタリア人女性の寝室用に描かれたのではないかと思います。イザベラは、この絵を購入した時に、絵の下に置いてある木製のチェストも一緒に購入しています。*それは**婚礼用の**チェストで、花嫁が自分のとっておきのものを新しい家に運ぶために使用したものです。中を覗いてみると**・・・豪華絢爛な18世紀のイタリア製ギターが入っています。

このギターは繊細過ぎて演奏できませんが、ボストン美術館のコレクションの中に、これと同じメーカーが作ったギターがあり、それは演奏可能です。この部屋では、このギターが奏でる音色が聴こえるかのようです。素晴らしいと思いませんか？

それでは、ルクレツィアの絵が掛けられた同じ壁に沿って、左手に進みましょう。**突き当りの窓の右側に、赤い服を着た男性が見えます。*

この絵にちなんで、イザベラはこの部屋の名前を決めました。この絵を手に入れた時、彼女は天に昇らんばかりに喜んだそうです。盛期ルネッサンスのイタリアの巨匠であるラファエロの絵画の中で、アメリカに持ち込まれた最初の作品でした。見事なコレクションです！有能な演説家であり、作家として有名だった、ラファエロの友人、トンマーゾ・インギラーミ伯爵の肖像画です。彼はバチカンの図書館で勤務していました。トンマーゾの片目は視力が弱く、このポーズでは、彼は空を見上げ、書き物をしている最中に神からの啓示を受けているかのように見えます。このポーズは彼の眼の状態を隠すかのようになっています。*

それでは、後ろを向いて下さい。* そして、この部屋全体を見渡して下さい。*イザベラが部屋全体をアート作品として見たてていたことが、この部屋からよく分かります。テキスタイルが様々な官能的な質感をうんでいます。部屋全体に、アート作品同士の間テーマや視覚に訴える会話のようなものが感じられます。もう1つだけご案内したいと思います。最初にご案内した動物の乗った大理石のボウルに戻って下さい。**ボウルの右側の、*窓を過ぎた所にキャビネットがあり、その上に大理石の足があります。その足からみて右手にあるのが聖母と子供の絵です。幼いイエスが母親を見上げ、母親は彼の脚をあやしているように見えます。母の愛を表わすよくある表現ですが、イザベラの母としての想いと明確に共鳴しています。彼女は大理石の脚をその横に置き、私達にも気付いてほしいと思ったのではないのでしょうか。

タペストリールーム

クリスティーナ・ニールセン：この大きな空間に足を踏み入ると、今までの部屋とは何かが違うと感じるのではないのでしょうか。アートギャラリーというよりは、私には、ヨーロッパ貴族の大広間のように感じられます。壁と天井は木製パネルでできています。

イザベラは、皆さんを取り囲んでいるこの巨大なタペストリーを収蔵するために、この部屋を創りました。これらの作品が製作された当時、細い絹糸で複雑に編まれたタペストリーは最も高価なアートオブジェとされていました。どんな絵画や彫刻よりも、はるかに貴重だと考えられていたのです。また、冷たい壁の断熱材の役目も果たし、丸めて運び、壮麗なインテリアを次々と変えることもできました。

今みなさんがこの部屋のどこにいても、この巨大な部屋の片側に暖炉があることに気が付くと思います。もう片方には暖炉はありません。暖炉がない側の端でお会いしましょう。**移動にもう少し時間が必要であれば、いつでもオーディオガイドを一時停止されてください。

壁を背に、赤いテーブルクロスのかかったテーブルと、その先には暖炉がある方向に向かって立ってください。**それでは、すぐ左手をご覧ください。そのタペストリーが私がご紹介したい、この部屋にある古代ペルシャ王、キュロス2世に関する5枚シリーズの中の1枚です。飾り紐で支えられている非常にファッショナブルな赤色のタイツを履いている、中央の若い男性がキュロス2世です。**彼はウサギの死体をもって彼に近づく男性に手ぶりをしています。ウサギの死体の中には、祖父に逆らってもペルシア帝国を制圧するようにキュロス2世を励ます密書が入っています。ペルシア王らしからず、キュロス2世はこの絵が製作された16世紀に流行ったヨーロッパファッションを身にまとっています。**

それでは、窓を通り過ぎて、このタペストリーの右側へ移動して下さい。*机の上のファッショナブルな女性の絵の近くに来て下さい。**イザベラが織物を愛し、収集したことは有名ですが、彼女はきっと、この女性のアウトフィットの魅力の虜になっていたに違いありません。なんて素敵な帽子でしょう！**緑色のローブは真珠で縁取られています。この肖像画を見ると、いつも、少しだけイザベラを思い出します。この肖像画のテーマは、ファッショナブルなだけでなく、並々ならぬ決意をもった女性です。きっとイザベラの心にも訴えるものがあつたはずです。これは、初期のキリスト教殉教者である、聖人エンガルシアです。彼女は、殉教のシンボルである背の高いヤシの葉を掲げています。その表情は冷静で、彼女の美しさを強調していますが、もう片方の手には、彼女が自分の信仰を否定しようとしなかった時に、頭蓋骨に打ち込まれたくぎを持っています。

この絵から、右手に向かい部屋の反対側にある、コートヤードを見下ろせる窓に向かって進んで下さい。***. その窓の右側に*布で覆われた4つの入れ物があります。布を持

ち上げ、**これらの4つの中で、一番左側にある最初の入れ物をご覧ください。イザベラが関心を持っていたコレクションの一つ、イスラム文化の手書きの原稿です。

左側のページは工学に関するものです。*1354年に遡り、「キャンドル時計」のデザインが記録されています。**次のページには、植物や可愛らしい鳥達が描かれており、古代ギリシャの医療に関する文章のアラビア語の翻訳が記載されています。薬草のガイドブックだったのです。その他の3つの入れ物に入っているものもイスラム文化の手書きの原稿で、ペルシア帝国の叙事詩、シャー・ナーメからのイラストが含まれています。どうぞ時間をかけてご覧ください。準備ができたら、部屋の反対側にある暖炉でお会いしましょう。暖炉の前に行くまで、デバイスを一時停止して下さい。***

暖炉の上にある絵画は、悪魔を踏みにじる、聖人ミカエルを描いたものです。* 絵画の下側の聖人の足の下で、横たわっている悪魔が見えるでしょう。スペインのアーティストであるバナバーレが生み出した想像上の融合生物を、私はとても気に入っています。水かきのある足を見て下さい。***腹部にもう1つの赤く塗られた顔があり、その表情はおどけて笑っていますが、不気味です。*この絵はアート作品の意味が時代によって徐々に変化する様子をよく表していると思います。現在の来館者の中には、悪魔の肌の色が黒色と赤色であることに戸惑う人もいます。そして、戸惑いを感じる人達に、有色人種などに対しての歴史的な民族表現に関する悩ましい問題を提起してしまいます。

絵画の下にある暖炉の燃え上がる様子を想像してみてください。悪魔がやってきた地獄の炎が、悪魔の真下にあるかのように見えるという、イザベラのちょっとした冗談に見えます。実際に、イザベラが、どのように、そしてなぜこの絵を購入したのかについて面白い話があります。

話はこうです。イザベラはこの絵が売りに出されていることを知りましたが、彼女が購入する前に、ハーバード大学美術館の副理事が購入してしまったのです。彼女はそれを聞きつけ、まさにこの部屋で、彼を夕食に招いたのです！*もう一方のピアノがある側のダイニングテーブルに座っている2人を想像してみてください。* 食事中、彼女は暖炉の上の空いたスペースを指さし、こう言いました。「あなたが最近15世紀のスペイン絵画を購入なさったことは承知しています。でも、あの暖炉の上に置いたらきっととっても素敵だと思いませんか？」そして、いたずらっぽく目を輝かせ、彼女はダイニングテーブルにあったナイフを手に取り、必要とあらば彼と戦って見せると冗談っぽくほのめかしたそうです！言うまでもなく、彼はイザベラにその絵を譲りました。

ダッチルーム

クリスティーナ・ニールセン：部屋の真ん中にある来て、2つの長テーブルに向かって進んで下さい。その周辺で、くつろげるスポットを見つけて下さい。**イザベラはイタリア製のあらゆる作品に情熱を注いでいましたが、アートコレクターとして最初に興味を持ったのはオランダとフランドル地方の作品でした。それがこの部屋から分かります。そして、もう1つこの部屋から分かるのは、アートコレクターが最悪の悪夢を見たという証拠です。壁側をご覧くださいと、2つの何も入っていない大きな額が見えます。**

これらの額には、**1990年に強盗により盗まれてしまった13点の作品のうちの2点が展示されて**いました。両作品とも、17世紀に人々に愛されたオランダの巨匠、レンブラントによる絵画でした。両方とも、強盗が額から切り取ってしまったのです。左側の絵画は、ある男性とその妻の肖像画でした。***右側の絵画は、レンブラントが描いた唯一の海景でした。*これらの絵画がないということは、この部屋へのイザベラの当初のイメージが完成していないことを意味しています。少し後にこの話の続きをします。

それでは、何も入っていない2つの額の間にある、鎧を着た男性の大きな肖像画をご覧ください。*フランドル画家のピーテル・パウル・ルーベンスによるもので、彼は17世紀の解放的なスタイルを先導した画家でした。例えば、まばゆいばかりの鎧からその想いが見て取れます。**ルーベンスはその大きく、大胆な筆遣いで、そのような想いを描いたのです。この肖像画に描かれた人物は、アランデル伯爵のトーマス・ハワードです。彼は将軍として描かれていますが、軍事戦略家としてはあまり優秀ではありませんでした。しかし、彼はその時代のアートコレクターとしては非常に優秀でした。ルーベンスが鎧を着た彼を描いたのは、おそらく、戦場ではなく、アートコレクションの偉業に言及しているのでしょう。そして、アートコレクターの肖像画であるという事実が、イザベラの心に訴えかけるものがあつたに違いありません。そして、この絵を入手したイザベラの偉業に加え、この絵はアメリカのコレクションに加えられた初のルーベンスの有名な絵画でした。

それでは、そのまま反対側の壁の方に向いて進んで下さい。**出入口の上に、馬に乗った男性の彫刻があります。**そのちょうど右側にある、羽根飾りが付いた帽子を被った若い男性に向かって下さい。**その男性は私達を正面から見つめています。これは、まだここに存在するレンブラントの素晴らしい絵画で、彼が23歳の時に描いた自画像です。当時、彼は有名になろうと必死で、自分の絵を買ってくれそうな顧客に対して、劇的な明暗の書き分けと多様な質感を駆使し、自分の才能を見せつけていました。肩越しには宝石が付いたチェーンを身につけ、反射する光まで細かく描写されています。影により顔の半分が曖昧に見えているところが、私はとても気に入っています。どうぞ近くに寄って、彼が何を考えているのか推測してみてくださいと言っているようです。

この絵は、この美術館が始まった当初からある作品です。イザベラはこの絵の前に数多くの重要な買付を行っていますが、それらの作品に関しては、彼女は自宅で保管しています。このレンブラントの絵画を入手したことで、美術館というアイデアが彼女の中にうまれました。自分はこのコレクターになりたいという理想について、彼女は手紙に記しています。その手紙を引用すると、「今後、二流のアート作品を追いかけることは許されず、一流のアート作品のみを所有しなければならないと思っています」と書かれています。

彼女は確かに自分のミッションに成功しました。そして、壁に展示するアート作品同士が会話をするかのように非常に慎重にアレンジしました。この若い男性の肖像画を鑑賞する時、レンブラントが後に描いた2つの絵画の配置から、部屋の中でこの肖像画の位置をどれほど慎重にイザベラが決めたのか、考えてみて下さい。41:11 イザベラは、この若いレンブラントが部屋を見渡せ、目前に広がる輝かしい未来を見せようとしたのでしょう。しかし強盗により、イザベラの完成したビジョンが奪われてしまったのです。

それでは、若き頃のレンブラントに背を向けて、*右側の窓の隣に、机と椅子があります。そこにも何も入っていない額があります。このアート作品も盗まれました。この美術館から消えてしまったフェルメールの絵画です。

この部屋でもう1つオブジェをご紹介します。ご自身では気付かれなくてもいいかもしれません。机と何も入っていない額から離れ、赤いケープをまとった男性の背の高い絵画に向かって進んで下さい。**その絵の右側に、背の高い木製キャビネットがあります。**その中に3つの棚があります。*中央の棚にある、一番背の高いオブジェをご覧ください。**ダチョウの形をしています。わかりますか？その羽根の下をよく見ると、実物のダチョウの卵の周りにシルバーでできた身体が形成されているのがわかります。これは17世紀のドイツの作品です。当時、卵は高級なシルバーを周りに置くほど非常に貴重だったのです。ダチョウはアフリカのみで見られる非常に大きな鳥なので、ヨーロッパ人はそれを「自然の不思議」だと考えたのです。このようなオブジェはヨーロッパのプライベートコレクションで人気が高く、「キャビネット・オブ・キュリオシティーズ」（好奇心の詰まった飾り棚）と呼ばれることもあります。これらの作品は美術館にとって先駆でした。45:19 初期ヨーロッパアンコレクションの中から何かを選ぶことは、コレクターとしてのイザベラ自身の考え方や、最も驚きを与えるオブジェで自分の美術館を埋め尽くすというアイデアにも、確実に訴えかけていました。*

強盗の話について詳細を知りたい方は、コートヤードの窓の近くのベンチに置いてある「Stolen」という本をご覧ください。また、美術館ウェブサイトにも記事が記載されています。

ティツィアーノルーム

ナット・シルバー：こんにちは、私はコレクションの**キュレーター**の一人であるナット・シルバーです。私がこの部屋をご紹介します。イタリアルネッサンスアートが私の専門分野で、この部屋には、美術館で最も重要なルネッサンスおよびバロック時代の傑作があります。

部屋の中央へ進み、プラットフォームの家具をご覧ください。これらの椅子が傑作であると言うと、あなたは驚かれるかもしれません。これらの椅子はローマルネッサンス宮殿のもので、家具職人**による**アートの視覚効果が組み合わされていることが特徴です。金箔で覆われた複雑な木のフレームが、金箔を施したブロンズ像を再現しています。**背もたれ**には見事に描かれた花柄のパネルが彫刻され、端に沿って全て皺ができて見えるように見えます。これは動物の皮を模倣したものです。イザベラはプラットフォームに美しい絨毯を敷き、これらの貴重な椅子を置くことで、貴賓を迎えるステージを表現しようとしています。

それでは、通りを見下ろすことができる長方形の窓のある壁の方へお進みください。* 2つの窓の間に、塗装された椅子と小さなテーブルが目に入るでしょう。* テーブルの上の小さな花が飾られた花瓶が置かれている場所です。

(Little more space here)

これはイザベラのお気に入りの絵画の1つでした。キリストが十字架を運んでいる様子が異常なほどタイトに額の中に収められています。キリストが私達を直視していることにより、アーティストのジョヴァンニ・ベッリーニは、キリストの痛みを私達にも感じさせようとしています。近くで見ると、キリストの頬に涙がにじんでいます。イザベラは、夫のジャックが亡くなったすぐ後にこの絵を購入しています。このテーブルには、ジャックの思い出が詰まっています。花瓶に、イザベラはいつも新鮮な花を生けていました。美術館では今でも慣習として、花を生け続けています。

それでは、この絵を通り過ぎて、目の前にある壁に、裸足の女性が描かれた大きな絵が見えると思います。画家の**ティツィアーノ**によるこの傑作は、アメリカにおけるイタリアルネッサンス絵画の最高傑作だと考えられており、それが、イザベラがこのギャラリーを「ティツィアーノルーム」と名付けた理由でもあります。この絵にインスピレーションを与えた太古の神話は、簡潔に言えば、次のような内容です。神々の王ジュピターが王女エウロペに恋をします。彼女を自分の恋人にしたいジュピターは、遊び好きな牡牛に化けます。エウロペは人慣れした牡牛に喜び、その頭に花の王冠をかぶせます。その瞬間、ジュピターは素早く行動に出て、彼女をさらい、海を渡ります。*ティツィアーノの描写には急ぐ様子が描かれています。水しぶきが上がり、赤い布が空を波打ち、恐怖を表わしているかのようです。*しかし、みなさんはこ

の描写から「拉致」といった印象を受けるでしょうか？あるいは「誘惑」といった印象を受けるでしょうか？

ヨーロッパからイザベラの元へ最初にこの絵が到着した日、彼女は大喜びでこう記しています。私の同僚のクリスティーナ・ニールセンが、皆さんにその文章をお読みします。

クリスティーナ・ニールセン：興奮しすぎて声も出ないわ。エウロペのことを考えると、息もつけないの。1人で飲みながら、エウロペに酔いしれて、それから何時間も座って、考えて、彼女の夢を見たの。この絵の全てが喜びに溢れているように思えるの。

ナット・シルバー：また、イザベラは、この絵のちょうど真下に実に素晴らしい展示を用意しました。左にあるテーブルの上には、ホルンを吹いている翼が付いた男の子のブロンズ像があります。*足元に小さな台座が付いていることから、この像はもともと直立するものだと分かります。*しかしながら、イザベラはこの像を横向きに置き、絵の隅にいる翼が付いた赤ん坊と同じポーズを取らせています。*そして、絵の下にあるタッセルが付いたファブリックパネルに気付きましたか？*これはイザベラのお気に入りのイブニングガウンから取ったものです。彼女はタッセルと牡牛の尾に視覚的な関連性を作りたかったのではないかと、私は思っています。**

それでは、この壁に沿って右側へ進んで下さい。***出入口の右側に**、黒い服を着て立っている男性の肖像画があります。*これは偉大なスペイン画家、ディエゴ・ベラスケスの作品です。イタリアのアート作品で溢れている部屋に、なぜスペインの絵があるのか不思議に思われるかもしれません。この部屋のもう1つのテーマはヨーロッパ貴族で、これはスペイン王フェリペ4世の肖像画です。イザベラは、王室に憧れを抱いていました。実際、彼女は自分の家族のルーツをスコットランドのメアリー女王としても知られているメアリー・スチュアートと関係づけようとしていたこともありました。この肖像画では、フェリペ王は正式な宮廷衣装をまとっています。頼みごとがあってフェリペ4世の宮廷に誰かやってきた時には、この絵のように、王は帽子を脱ぎ、テーブルの上に置くことで、その人達の話聞く準備ができたことを示唆していたことが、史料から分かっています。

それでは、次にフェリペ4世の横にある彫刻をご覧ください。ダークブロンズのこの素晴らしい胸像は、ローマ法王の銀行家の肖像です。これは、一流彫刻家でもあり、ローマ法王の金細工職人でもあったベンヴェヌート・チェッリーニの作品です。信じられないほどのディテールを施した上質な金属細工から、彼の腕前が分かります。印象的な強い巻き毛の口ひげと、彼の着ている服のテキスチャーの**コントラスト**が、私は特に気に入っています。*

この部屋でもう1つお見せしたい作品があります。他とはかなり異なる作品です。花瓶に花が生けられた机の上のキリストの絵まで戻って下さい。**** その近くの壁に、黄色に塗装された2つの同じ背の低い木製キャビネットを見つけて下さい。**これらの小さなチェストの前側には

引き出しが付いているように見えます。しかし、これは実はドアになっており、大きく開くようになっています。その中には・・・おまるが入っています！ トイレに行くためのものです。この部屋におまるがあることにより、イザベラは高級なものも安いものも融合させるのが大好きだったことを思い出させてくれます。そしていつも、私達を驚かせてくれます。

それとこの部屋は、コートヤードを見下ろす最高の景色が見られると私は思っています。ここから、コートヤード中央にあるメデューサのモザイクがこちらを向いているのが見えます。

ALTティツィアーノルーム —ヨーロッパ抜き

NOTE: parts in grey do not need to be re-translated or re-recorded

ナット・シルバー : Hi, I'm Nat Silver, Associate Curator of the Collection, and I'll be taking you around this room. Italian Renaissance Art is my specialty, and this room has some of the museum's most important Renaissance and Baroque masterpieces.

Move into the middle of the room – and you may be surprised that I'm pointing out these *chairs* as some of those masterpieces. They're a set from a Roman Renaissance palace, and each of them features a *combination* of visual effects of the furniture makers' art. The intricate wood frames, covered in gold, simulate the appearance of gilded bronze. And the flowered panels on their backs are carved to appear puckered all along their edges, to imitate animal hides, pieces of leather. Isabella placed them on a platform, conveying a stage, set to receive honored guests.

Now, look for the wall with the rectangular windows.* * Between two of the windows you'll see a chair and a round table, with a painting on it.** A sign that you're in the right place is the little vase of flowers on the table. This was one of Isabella's favorite paintings. It's an unusually close-up view of Christ carrying the cross. By having Christ look directly at us, the artist Giovanni Bellini makes us feel part of Christ's pain. Peer in closely and you can see tears his cheek. Isabella bought this painting soon after her husband Jack died. She created a memorial to him at this table. In the vase she *always* kept fresh flowers. It's a tradition the museum continues to this day.

それでは、目の前にある壁に向かって進んで下さい。出入口の右側には、彫刻があります。ダークブロンズの素晴らしい胸像です。これは、一流彫刻家でもあり、ローマ法王の金細工職人でもあったベンヴェヌート・チェッリーニの作品で、ローマ法王の銀行家の肖像です。信じられないほどのディテールを施した上質な金属細工から、彼の腕前が分かります。印象的な強い巻き毛の口ひげと、彼の着ている服のテキスチャーのコントラストが、私は気に入っています。* *

この胸像の左側に、黒い服を着て立っている男性の肖像画があります。*これは偉大なスペイン画家、ディエゴ・ベラスケスの作品です。You may be wondering why there's a Spanish artist in this room full of Italian paintings. Well, another theme of this room is European aristocracy; and this is a portrait of the Spanish King, Philip IV. Isabella Stewart Gardner was fascinated with royalty. In fact, she tried to connect her own family roots to *Mary* Stuart, also known as Mary Queen of Scots. In this portrait, Phillip is dressed in formal court attire. When anyone came to Philip IV's court to request a favor, he would indicate his readiness to hear them by removing his hat and placing it on a table next to him, as we see here.

I want to show you one more thing in this room. To find it, go back towards the close-up painting of Christ on the desk.* * To the left of it on that wall there are two low, matching wood cabinets, painted yellow.* These little chests look like they have drawers. But the front of each one is a solid door that swings open. Inside there are.... chamber pots! For going to the bathroom. Having them in this room reminds us that Isabella loved to mix high, and low. And always, to surprise us.*

Oh, and a note that this room has, / think, the best view down into the courtyard. From here, the mosaic in the center of it, the Medusa, is facing us.

ロングギャラリー

クリスティーナ・ニールセン： この狭い空間は「ロングギャラリー・長い回廊」と呼ばれています。理由は明確ですよね。このギャラリー内には数多くの箱棚が並べられており、アーティストや作家、そして大統領や王室に関する珍しい書籍、書簡や個人的な作品が入っていました。ギャラリーには非常に様々な時代や場所の作品が数多く収蔵されています。

ギャラリーの端にステンドグラスの窓が見えると思いますが、その反対側の端にご紹介したい作品がいくつかあります。準備ができれば、ロングギャラリーの端でお会いしましょう。**

ギャラリーの端にある四角い窓に向かって下さい。左側に、赤ん坊のイエスを抱き、青色の服を着た聖母の絵を探して下さい。*愛らしい幼い男の子である天使も、彼らと一緒にです。*繊細で透明な布の描写でも知られるイタリアルネッサンスの巨匠、サンドロ・ボッティチェッリの作品です。聖母の頭にかかっている透明なベールをご覧ください！そして、その絵の真下にイザベラが置いた、イスラムガラスの素晴らしい作品もご覧ください。14世紀のモスクのランプの一部です。その透明さ、そしてエレガントな金色と青色のデコレーションは、その絵にぴったりマッチしています。聖母のガウンに書かれた疑古文は、このガラスランプ同様に、イスラム圏からイタリアへ輸入された碑文にインスピレーションを受けています。このペアリングは、イザベラが異文化を結合させるのが好きだった一例です。特に、このギャラリーにあるそのようなコネクションを探してみてください。

この空間に祈りの響きを与える、巨大なステンドグラスの窓が反対側の端にあります。*フランス北部のソアソン教会のステンドグラスです。時間をかけて近くに寄ってみて下さい。そして、近づくと、窓のちょうど真ん前辺りに小さな聖なるチャペルがあることが分かります。イザベラは敬虔なアングロカトリック教徒で、彼女は生涯、礼拝のためにこの小さなチャペルを使用していました。毎年1回、礼拝が開かれています。それは、イザベラの誕生日である4月14日です。

ゴシックルーム

クリスティーナ・ニールセン：私はコレクションキュレーターのクリスティーナ・ニールセンです。今、私達は「ゴシックルーム」にいます。中世後期のアートと建築から名づけられました。この部屋は主に宗教美術に捧げられています。どの方向からこの部屋に入っても、丸いゴシック窓からさす光のきらめきと暗い天井と壁のコントラストが印象的でしょう。**部屋の片隅から空間を支配するかのようになっているのは、実物大のイザベラの肖像画です。**幅広の金箔を施した額に飾ることより、この部屋の中でも特別な存在感を表しています。*彼女に近づいてみて下さい。*イザベラはまるで皆さんを歓迎するかのよう、口元を少し開けて微笑んでいるようにも見えます。1880年代に最初にボストンのプライベートクラブで公開された時、この肖像画はスキャンダルを巻き起こしました。ビクトリア時代のボストン市民にとって、そのまばゆいばかりに美しい身体の描写はかなり衝撃的だったようです。全体的なアプローチが斬新すぎたのでした。それでも、この絵は中世の美術品で溢れるこの部屋に本当によくマッチしているように思えます！背景の模様やデコレーションに対し、彼女の身体が迫ってきます。そして、イザベラは、ロングギャラリーで展示されている中世のテキスタイルの前に立っています。その模様が、彼女に永年の「後光」や王冠を授けているようです！絵の前に、アッサンブラージュが祭壇のように見えるように、彼女は大きな聖歌隊の本を置いています。彼女のお気に入りによく身につけていたルビーが付いたロングパールネックレスが、腰周りにあしらわれています。

1階で見た、ガーデンコートヤードの近くのフラメンコダンサーの絵を覚えていらっしゃいますか？これは同じアーティスト、ジョン・シンガー・サージェントの作品です。彼はこの部屋をアトリエとして時折使用していました。

それでは、肖像画の右手をご覧ください。4枚の背の高い、幅狭の窓があります。**その窓の前に、赤い布で覆われたテーブルがあり、背中合わせにした2枚の絵があります。イザベラの肖像画と向き合っている、テーブル側の絵をご覧ください。**この美しい聖母子は、中世後期絵画の巨匠、シモーネ・マルティーニの作品です。1つだけ注目していただきたい箇所が作品の右下の隅にあります。膝まずいている女性が見えますか？彼女がこの絵の寄贈者で、1325年頃、ある教会のためにこの絵の制作を依頼しました。イザベラがこの作品を自分の肖像画と向き合うように置いたのは、この芸術を支援した女性と自分を重ね合わせたのではないかと、私は考えずにはられません。そして、2人とも黒い服を着ています。

それでは、テーブルの反対側にまわってもう1つの絵をご覧ください。*この絵は非常に珍しく貴重な作品です。北米に数点のみ存在するジョットの作品の1つです。ジョットは、信仰心溢れる作品で心理的リアリズムを描写した、初のイタリアルネッサンス画家でした。キリストの十字架上の死を予示するため、赤ん坊のイエスが腕を大きく広げているのに気が付くと思います。*片方の手は、普通の赤ん坊のように、イエスを抱きかかえている男性の顔ひげを掴んでいます！そして、本当の赤ん坊のように、もう片方の手を母親に向かって伸ばしています。絵

の中央には基本的に何も描かれていません。この作品は、シモーネ・マルティーニの作品と同じ時代、1320年代に制作されたと言われています。しかし、ジョットの作品はなんだかとてもモダンに感じられます。

それでは、そのままの位置で、ジョットの作品に背を向け目の前にある壁に向かって移動して下さい。*コートヤードに面した窓の間の中央の壁に、連結された3枚の肖像画のパネルが掛かっています。*そのパネルの肖像画は、3次元的に浮かび上がって見えます。ドイツのゴシック祭壇画ですが、神聖なる有力者達が全くの一般人かのように、そして、魅力的に描かれています。中央には、白いベールを頭に被った聖母マリアとその母親が描かれています。聖母マリアとその母親の間で赤ん坊のイエスが暴れています。*下側を見ると、1人の女性が授乳していますが、もう1人の赤ん坊はドイツ製の大型ジョッキから何かを飲んでいますが、*そして少し・・・酔っているように見えませんか？*美術館のあちこちで見受けられるように、イザベラは冗談が分かる人でした。

この部屋でもう1つご紹介したいものがあります。祭壇画に背を向けて、部屋の中央にある長いテーブルをご覧下さい。テーブルクロスが掛けられたテーブルです。*その端の皆さんに一番近い場所に、長い金属製のオブジェがあります。*そのオブジェには、弓なりの角と広く突き出した耳の付いた牡牛の頭が付いています。それは、ペルシャ製のメイスという武器です。これはコレクションの中でも私の大のお気に入りのオブジェなので、紹介せずにはいられませんでした。メイスを振りかざし、振り回すと、ピューという音が出るのです！敵を脅すための心理的駆け引きのようなものですね。

そして、この美術館の全ての展示室に見るべきものがたくさんあるということを知らせてくれています。ゆっくり時間をかけて、楽しめる作品を探して下さい。それが、最終的に、イザベラが最も望んでいたことなのですから。